

東アジアの文化交流

——許浚撰著『東医宝鑑』と日本の受容——

貫井正之

はじめに

日本では許浚^{ホジュン}および彼の撰著『東医宝鑑』⁽¹⁾は、一部の研究者を除き殆ど知られていない。むしろ日朝医学交流が盛行し、その恩恵を蒙った江戸時代人が現代日本人よりよく知っていたかもしれない。近年日本で小説李恩成^{イオンソン}・朴菴熙^{パクチャンヒ}著訳『許浚』(原題『小説 東医宝鑑』)⁽²⁾が出版され、韓国MBCの「許浚」、韓国KBS「『東医宝鑑』(許浚の為民精神)」が日本で放映された。それらを目にした日本人は、許浚の医者としてヒューマンな生き様、同書の医薬学水準の高さに驚嘆させられた。私もその一人である。しかし、小説・映像世界の物語は限りなく興味を引くが、あまりにもフィクションが多い。

日本で許浚撰著『東医宝鑑』を本格的・学術的に考究し、紹介したのは三木栄氏を先駆とする。⁽³⁾ 本稿は先人の業績に学びつつ、表題のテーマを以下の構成で論述する。1章～4章の前半は序論として、許浚及び『東医宝鑑』の概論的な紹介に充てた。本論は5章～7章である。許浚撰著『東医宝鑑』がいつ頃、いかなる過程を経て日本に受容され、それが日本医学の発展にどのように寄与したか等を8代將軍徳川吉宗の享保改革と関連させて明らかにしたい。次いで江戸時代、朝鮮医学が朝鮮通信使医員を通じてどのように日本に伝授されたか、さらに中国を含めた東アジア3国の医学交流がどのように展開し、その果たした役割等を論究したい。

なお、本稿の執筆に当たり、三木氏の著作以外に関連論著として田代和

生氏、大石学氏の労作に負うところが大きい。⁽⁴⁾

- 註(1) 許浚は『朝鮮人名辞典』(朝鮮総督府中枢院、1937年)で数行の記載であり、『朝鮮人物事典』(大和書房、1995年)ではまったく触れられていない。『東医宝鑑』は『朝鮮図書解題』(朝鮮総督府、1919年)、『朝鮮を知る事典』(平凡社、1986年)で僅かに紹介されているだけである。また、『国書総目録』(吉川弘文館、1973年)には和刻本『訂正東医宝鑑』の紹介はない。
- (2) 『許浚』(結書房、2003年)、『ホジュン』(講談社文庫、2006年)。
- (3) 三木栄氏の著作は以下のものである。『朝鮮医学史及び疾病史』(自家出版、1963年)、『朝鮮医書誌』(自家出版、1956年)、『朝鮮医事年表』(思文閣出版、1985年)。諸業績は氏の医者としての専門的な知見が生かされている。本稿中引用の参考文献、三木『前掲書』はすべて冒頭著を指す。
- (4) 田代和生『江戸時代 朝鮮薬材調査研究』(慶応義塾大学出版会、1999年)、大石学『享保改革の地域政策』(吉川弘文館、1996年)。

1、許浚とは⁽¹⁾

許浚は1546(明宗元)年から1615(光海君7)年にかけて生き、朝鮮時代中期に活躍した名医である。本貫は朝鮮京畿道陽川、字は清源、号は亀巖を称した。父は朝鮮王朝の地方官吏(両班)、母は側妾、許浚はその間に生まれた庶子(妾腹)であった。29歳で雑科の医科に合格し、その後累進を重ね1575(宣祖8)年には国王の御医にまで昇った。許浚の最初の著作は脈学の基本を明示した『纂図方論脉訣集成』4巻であり、その功により医員では稀な堂上官(正3品)を拝命した。1592(宣祖25)年壬辰倭乱時、御医として義州まで国王の播越に随行した。1604年、3等忠勤貞亮扈聖功臣⁽²⁾、1606年、陽川君を授爵している。1610年には朝鮮・中国医薬学を集大成した『東医宝鑑』を完成させた。同書は官刻版として広く流布した。⁽³⁾ 他に許浚は天然痘救済の『諺解痘瘡集要』、授産法の『諺解胎産集要』、疫病対策の『新纂辟瘟方』、『辟疫神方』等実用的で卓越した医書を次々と著述した。1615年、死去、享年は69歳であった。王朝は正1品輔国崇祿大夫を

追贈した。しかし、韓国でも許浚の顕彰がはじまったのはごく最近である。1991年、朝鮮半島の軍事境界線に近い民間統制区の京畿道坡州^{パジュ}で土中に埋没していた彼の墓石が民間人よって発見された。また、2005年にソウル市内に許浚記念館・亀巖公園がオープンした。

それでは朝鮮第1の医聖として名声を馳せ、王朝高官まで昇りつめた彼がなぜ長期間歴史上から抹殺されていたのか。それは彼が庶子身分であったからである。彼の死後、1700年に作成された『陽川許氏族譜』⁽⁴⁾には許浚の記載はなく、1750年の『族譜』によようやく許浚名が付け加えられている。しかし、彼の氏名の上には小字で庶子と明記され、それでも「御医 扈聖功臣 崇祿陽平君贈輔国 撰東医宝鑑 夫人安東金氏」の添書はある。位人臣を極め、医学界に不世出の業績を残した彼にして族譜(系図)上の扱いはこうである。いかに朝鮮時代の身分制度が苛酷であったかを垣間見る。

註(1) 許浚の経歴を記録する史料は数少ない。ここでは『宣祖実録』、『光海君日記』を基本史料として、朝鮮総督府編『朝鮮人名辞典』、「許浚一代記」(ソウル亀巖公園石碑)、星原幸次郎『朝鮮漢医の倉越 許浚』(江南プレスセンター、2005年)、結書房刊『許浚』朴菴熙・菊地英昭氏の解説等に依った。

- (2) 『宣祖実録』 卷175、宣祖37年6月甲辰条。
- (3) 『光海君日記』 卷32、庚戌8月戊寅条。
- (4) 許氏の族譜はいずれも許浚記念館蔵。

2、朝鮮時代の医療制度

ここで許浚が活動した朝鮮時代の医療制度を簡潔に紹介する。王朝の医療関係部署は吏曹に属した。

[正3品衙門^{がもん}]

内医院 = 国王の治療を主業務とする。宮中最高の王室医療機関。

典医監＝医療行政の中枢機関。王室、高官の治療。医療行政・医科試験等の業務を担当する。

[従6品衙門]

惠民署＝医薬を供し民庶を診察し、医学生、医女の教育機関。

活人署＝都城の庶民を救済するための医療機関。食糧の給付も行い貧民救済の役割を果す。

[従9品相当]

医薬官＝8道地方官庁に配置。『医方類聚』266巻等常置。

郷薬田＝都城、8道地方官庁に設置。『郷薬集成方』85巻等常置。⁽¹⁾

しかし、朝鮮時代の医療行為は中宗時代（1506～1545年在位）から中国医学（漢方医）への傾斜を強め、朝鮮伝統の医薬療法が軽視された。先述の朝鮮で編纂された貴重な2著の医薬書もさほど活用されなかった。その上、主な薬材は中国の輸入品に頼ったため朝鮮人の治療に適応性を欠いたことや庶民にとって輸入薬材は高額で入手できなかった。

註(1) 『経国大典』吏曹条。

3、『東医宝鑑』編纂・著述過程

壬辰倭乱の余塵がまだ醒めやらぬ1596（宣祖29）年、宣祖王^{ソンジョ}は本格的な医薬書編纂事業を内医院に命じた。その意図・背景は、

- 1、壬辰倭乱という未曾有の戦乱によって朝鮮社会・国民の医療・衛生状態が極度に悪化したこと。
- 2、日本軍によって貴重な医学書が大量に略取され、また戦乱によって医学書が焼失したこと。
- 3、日本軍によって朝鮮人医者が拉致されたか戦死・逃亡し、国内に良医が極度に不足したこと。
- 4、明国も壬辰倭乱援軍の疲弊により、朝鮮への薬材輸出が困難になっ

た。また、中国東北部は女真族の台頭により治安悪化をまねき、朝鮮への薬材搬入ルートが閉ざされたこと。

5、中国医薬の盲目的依存から脱却し、朝鮮固有の環境・病理治療に適した医学書・薬学書を必要としたこと。

等であった。

王朝は内医院に編纂局を設置し、許浚^{ホジュン}・楊礼寿^{ヤンイェス}・李命元^{イミョンウォン}・鄭礼男^{チョンイェナン}等当代一流の官医員が集められ、彼らは本格的な医薬書編纂事業にとりかかった。ところが、翌年の1597年、丁酉再乱によって編纂局は解散し、医員達は四散した。戦後、宣祖王は引き続き許浚個人に編纂・著述事業を命じた。しかし、1607年宣祖王が崩御すると御医の許浚は責任を問われ、僻地に流罪となった。しかし、次王の光海君^{クワンヘクン}は許浚の編纂事業を応援し、1610年、14年の歳月を経てようやく撰著が完成した。光海君は1613年、これに『東医宝鑑』と命名し内医院で印刷させ、地方（官営全州版^{チョンジュ}、嶺堂大邱版^{テグ}）でも印刻を重ね広く全国に普及させた。光海君は許浚の労をねぎらい熟馬1匹を下賜した。⁽¹⁾

註(1) 『光海君日記』巻32、庚戌8月戊寅条。

4、内容・特徴

『東医宝鑑』は許浚によって中国・朝鮮医薬書86本を参考文献とし、さらに自らの臨床経験を生かして撰著された。許浚は医学理論よりも実用性と経験を重んじた。従来朝鮮医薬書で著名なものは、15世紀中期の世宗朝^{セジョン}に編纂された『郷薬集成方』85巻、『医方類聚』266巻、16世紀初期の『医林撮要』8巻等があった。前2著は内容が膨大過ぎたのと中国医薬に傾倒したため宣祖時代には殆ど実用されていなく、後者は簡略過ぎて役に立たなかった。それらの弊害を除去し、従来朝中医薬学の諸書を集大成した『東医宝鑑』によって、朝鮮医薬学が確立した。⁽¹⁾ 別の表現をすれば、同書

は中国医学（漢方）に依存していた朝鮮医学（韓方）の独立宣言の書である。⁽²⁾

同書の大きな特徴は分類方式が現代の臨床医学に酷似していることである。すなわち、

- 1、内景篇（内科）
- 2、外形篇（外科・眼科・耳鼻咽喉科・皮膚科・泌尿器科）
- 3、雑病篇（病理科学・診断学・対症療法・救急方・伝染病科・婦人科・小児科）
- 4、湯液篇（薬草学）
- 5、鍼灸篇（経穴部位・鍼灸療法）

等医療分野が整然と分類され、1～3篇は疾病ごとに病状・治法・治薬法等が詳細に記され、4編は膨大な郷（朝鮮産）薬草種と効能、5篇は伝統的な鍼灸治療法等で終わっている。さらに、原著は当時の公用語である中国文（漢文）で書かれているが、許浚はより広く庶民（常民・奴婢等）まで活用できるようハンゲル版も著述した。この結果、医者だけでなく民衆も同書を見れば、一目瞭然にあらゆる病気の治療・予防に当たることが可能になったのである。このような分類方法は許浚の道教思想と臨床経験が濃く反映していると言われている。⁽³⁾

私が同書で特に注目したのは、『東医宝鑑』内景篇の冒頭をはじめ随所に掲載されている人体解剖図および臓器図である。17世紀初期のものとしては精緻な図であり、現代の解剖図と比べても遜色ない。許浚の豊富な臨床経験と中国医書の呉簡編『おうきはんごぞうず欧希範五臓図』他から集約したものであると言う。⁽⁴⁾

しかし、私は別見解を持つ。同書の解剖図は、朝鮮で人体解剖を行った直近の図でなかろうかと筆者は考える。壬辰倭乱時（1592～98年）、チョン ウ セオン全有亨が死体を解剖したという記録がある。すなわち、

我国全参判有亨、素曉医方、至有撰著成書、以利後人於無窮、活人之功為如何、而甲子之乱、斬亦以非辜不免、人謂全当壬辰倭乱、行道間三屠死屍、然後其術亦精通、然其橫命之死、亦坐此為殃云爾。⁽⁵⁾

大意は以下の通りである。全有亨は医方に通曉し、医書もあり、多くの
人々に貢献した。壬辰倭乱時には路傍の死体を3度にわたって解剖し、そ
の方面に精通していた。甲子の乱（1624年）で非業の死を遂げたと言う。
彼は参判（従2品）という肩書きから察して朝鮮王朝の上級官吏であり、
実在の人物である。日頃医学に関心の高かった彼は壬辰倭乱という非常時
に乗じて人体解剖を実施したのである。同時代人で医業に携わっていた許
浚がこの情報を知らぬはずはないし、彼自身も路傍の傷ついた人体、遺棄
された死体に遭遇し、そのような機会がなかったとは言えない。また、臓
器の摘出については咸鏡道義兵鄭文學軍が日本兵の死体腹部を腑分けして
晒した。⁽⁶⁾

儒教理念が浸透していた朝鮮社会では、平時は至難の人体解剖も医者達
の医学発展と疾病治癒の熱望は押さえがたく、戦時という異常事態の中で
それが実施されたとしても不思議でない。まして不倶戴天の敵、日本軍兵
士の路傍の屍には人体に対する畏敬の念や躊躇の気持ちは少なかったであ
ろう。このような時代的背景を踏まえなんらかの人体解剖結果が許浚の
『東医宝鑑』中の精緻な解剖図に反映されたと考える。

ちなみに日本での人体解剖実施は、蘭医山崎東洋の1754（宝暦4）年が
最初であり、杉田玄白達による人体解剖図『解体新書』の翻訳本の刊行が
1774（安永3）年である。ヨーロッパではルネッサンス・宗教改革が、中
世の暗黒時代を打ち破り諸学問の科学的な発達を促した。医学界では早く
も16世紀中ごろから人体解剖が始まり、それが西洋医学の世界制覇の決め
手となった。

註(1) 朝鮮総督府編『朝鮮図書解題』をはじめ諸書では、このように位置付ける。

(2) 『ホジュン』東医宝鑑条（コリア・エンターテイメント社、2007年）。

(3) 三木氏は「『東医宝鑑』の編述には彼の信奉する道経の功利実用主義を適
用し、詳確を期した。」（三木『前掲書』184頁）とあり、田代氏は「著者の
許浚が道教信奉者であったことから、医学の第一義を精・気・神として、

これらと内臓諸器の生理的機能や直接的病症を一括したためといわれている。」(田代『前掲書』19頁)と記す。

- (4) 三木『前掲書』368頁。
- (5) 李瀛イウイ編著『星湖僊説類選』巻5、五臓図条。
- (6) 「北関大捷碑」銘文。

5、徳川吉宗、享保改革と朝鮮

日本に外国の医書、とりわけ朝中医薬書が大量に渡来し、朝鮮医者が来日したのは、壬辰倭乱を契機としている。これは日本軍による戦時の文化財・知的財産略奪の結果であったと言える。⁽¹⁾ この戦争を経て日本医学は飛躍的に発展した。

朝鮮で1610年『東医宝鑑』が刊行されると日本へはいち早く対馬藩や朝鮮通信使を通して同書の優秀性が伝えられた。第4次(1636・寛永13年)朝鮮通信使医員ベクトリップ白土立と日本医師野間三竹が『東医宝鑑』等を話題にして医事問答を交している。⁽²⁾ 同書そのものが日本へ請求されたのは、発刊後約50年目の1663(寛文3)年頃である。この時朝鮮王朝は同書とともに『医林撮要』、牛黄等日本の請求を許可したと記している。⁽³⁾ しかし、日本では『東医宝鑑』は稀購本のためごく限定された人のみが閲覧でき、一般には殆ど目に触れることはなかった。そのため日本各地から対馬藩へ『東医宝鑑』の調達要請が強く、同藩では1660年代から90年代にかけて朝鮮へ5回にわたって同書を求請している。⁽⁴⁾

江戸時代は日本国中、疫病が幾度も大流行し多くの犠牲者をだした。とりわけ、17世紀末から18世紀にかけて疫病が猖獗を極め社会不安を増大させた。⁽⁵⁾ ここに江戸市中の惨情を記した1716(享保元)年の被災史料がある。

一ヶ月の中に江武(江戸)の町々にて死するもの八万余人に及び、棺をこしらゆる家にも間に合はず、酒の空樽を求めて亡骸を寺院に葬

するに、墓地に埋む所なければ、宗体（宗派）にかかはらず、火葬ならでは不納と云ふ、よりにて火葬せんとすれば、棺桶の数限もなく積重ねて十日二十日の内には火をかけることならず、其の到来の順次に茶毘にすれば日数をはるかに経ると云ふ、ここに於て、貧しきものの亡骸は、如何ともすべきやうなく、町所の長たる人々も世話行届かで、公庁へ訴へまうせしかば、夫々の御慈悲を賜はり、寺院に仰せつけられ、葬りがたき亡骸をば回向の後、菰に包みて、舟に乗せて悉く品川沖へ流し、水葬になされしと云ふ。⁽⁶⁾

と記している。「江戸市中では1か月の間に8万人余の人が亡くなった。棺桶が間に合わず酒樽で間に合わせたが、寺院では埋葬する墓地が不足し、火葬にすれば納めるといふ。ところが死体は積み重ねたまま放置され、茶毘するまで日数がかかった。そこで埋葬できない亡骸は回向した後、菰に包み品川沖に運び、水葬にした。」と言う。

1716（享保元）年は、吉宗が8代将軍に就任した年である。時に33歳。彼の出自、前半生は決して恵まれたものでない。母は紀州藩邸に仕えていた下女中であり、彼は3男の庶子であった。長じて北陸の小藩鯖江3万石の藩主となったが、あくまで嫡流でなく傍系であった。ところが、本家の紀州藩では藩主の兄達が相次いで急逝したため、僻地の小藩主吉宗に56万石の名門の大職がめぐってきた。さらに、徳川宗家の7代将軍家継に世継ぎがなく、次将軍職の本命とされていた尾張藩主徳川吉通は疫病のため倒れた。この病気は貴賤の別なく感染した。⁽⁷⁾ライバル達に比して吉宗は体軀堂々とし、頑健そのものであった。彼の推者達にはそれが頼もしい後継者と映ったのかもしれない。この疫病蔓延が吉宗将軍襲職の一背景でもある。

新将軍吉宗は幕政再建と社会不安一掃の期待を一身に集めて登場した。吉宗は襲職すると享保の改革（1716・享保元年～1735・享保20年）に着手した。本稿では享保改革中の医療制度改革に焦点を当てて論述する。幕府

の始祖家康は自ら薬材を調合するほど漢方の造詣が深かったことはよく知られている。家康の実子紀州藩祖徳川頼宣も熱心に朝鮮薬種を求め、自藩の薬草園で育種を試みた。彼らの血筋を受けてか吉宗も医薬に関心を持っていたが、それ以上に最高為政者吉宗を駆り立てたのは、疫病流行による社会不安を沈静化することであった。吉宗はこの非常事態に直面し、日本の医療制度、疫病対策の脆弱さを痛感したに違いない。

吉宗は襲職の年、対馬藩に対して許浚撰著『東医宝鑑』を所望し、対馬藩主宗義方そうよしまさは翌年、同藩文庫所蔵書を献上した。⁽⁸⁾ 吉宗は『東医宝鑑』を座右の書とし、同書掲載の朝鮮薬材の人参をはじめ薬種を求め、日本での育種に意欲を燃やした。⁽⁹⁾ また、丹羽正伯が16世紀中期に完成した朝鮮地理全書『東国輿地勝覧』とうごくよちしょうらん (56冊) を献上したところ吉宗は喜色満面であったという。⁽¹⁰⁾ 同書には朝鮮全道の薬材を含む特産品が網羅されていたからである。吉宗の関心は『東医宝鑑』や朝鮮の医療制度を通して、朝鮮医薬のみならず朝鮮そのものに強い畏敬の念を持ったと考える。彼の朝鮮への思い入れは、朝鮮通信使接待を「正徳の例を廃し、天和の旧例を復興す」という厚遇施策にも現れている。この変更は単なる前政権批判という単純なものではなく、吉宗自身相当熟慮した結果であり、彼の朝鮮観の反映であった。通信使聘接では新井白石の簡素化を否定した感は否めないが、朝鮮人参国産化等で銀流出の抑制を図る経済政策は前政権を継承している。⁽¹¹⁾

従来享保改革の関心は高くても、医療制度改革の研究は少なくあまり知られていない。同改革の医療関連事項を列挙すると以下の通りである。

- 1716(享保元)年、吉宗、8代將軍襲職。享保改革着手。『東医宝鑑』を対馬藩に所望。小石川薬草園を4800坪に拡充。吉宗、朝鮮鳥獸草木薬種調査令。その後、朝鮮薬材・薬種調査・蒐集作業は続く。この頃、疫病大流行。
- 1717(享保2)年、対馬藩主宗義方、同藩文庫の『東医宝鑑』を献上。
- 1719(享保4)年、朝鮮通信使、来日。吉宗の命により、幕府医師、通

信使医員と4度にわたり医事問答。

1720(享保5)年、吉宗、丹羽正伯・野呂元丈・植村政勝等に国内の薬草見分を命ず。以後30年余、日本全国に実施。駒場薬草園、1万坪開設。

1721(享保6)年、小石川薬草園、4万9600坪余に拡張。対馬藩士越常右衛門、薬材質正官となる。対馬藩、幕府に朝鮮人参生根3本献上、育種。

1722(享保7)年、小石川薬園に養病所(庶民無料診察所)新設。小金野薬草園、30万坪開設。対馬藩、朝鮮人参生根6本献上、育種。

1723(享保8)年、小石川養生所制度確立。

1724(享保9)年、吉宗、幕府刊行物として『訂正東医宝鑑』刊行。

(『徳川実記・有徳院殿御実記』、三木『前掲書』、田代『前掲書』、大石『前掲書』他より作成。)

享保改革の初期10年は、医療制度改革に集中している。この改革の右腕になったのが、吉宗の紀州以来の奥医師林良以・良喜父子、それに本草学の丹羽正伯・野呂元丈・植村政勝達であった。彼らは幕臣としての身分は低かったが、将軍吉宗の庇護のもと医療行政に存分に力量を發揮した。1719(享保4)年、林父子達は吉宗の襲職祝賀使として来日した朝鮮通信使随行医員と4度にわたって医事問答を行った。当然、それを指示したのは吉宗であった。3回の会談に同席した製述官申維翰^{シンユハン}は、『海游録』に林父子との詩文応酬について記している。¹²⁾

良以の死後、25歳という若さで奥医師に抜擢された良喜に対する吉宗の期待は大きかった。養病所の前身施療所へ臨床診療の経験を積ませ、医学知見を深めるため『東医宝鑑』の校訂も命じた。¹³⁾ さらに、良喜、正伯達に朝鮮・中国・オランダ等の薬種、元丈、政勝達には国内中の薬草見分を命じた。彼らの出身地は紀州藩の飛び地、伊勢の櫛田川沿いの松阪、飯高郡

地域に集中しているのに興味を引く。吉宗の期待もむなしく良喜は奥医師襲職後、2年目の27歳という若さで死去した。しかし、正伯・政勝達は彼の残した仕事を立派に継承した。幕府の少壮医療官達を援助して活躍したのが対馬藩士の薬材質正官（調査官）越常右衛門であった。彼は朝鮮釜山倭館を往来し朝鮮薬材・薬種調査・蒐集の任に当たり、1725（享保10）年、その功績により吉宗より時服を拝領している。⁽¹⁴⁾ 彼らの国内外の薬草調査・蒐集・育種の成果は、全国的な薬材流通政策へと発展した。

吉宗は朝鮮人参の薬効も十分認識していた。彼は医療改革として朝鮮人参生根を移入し、幕府の薬草園をはじめ日本各地で人参国産化政策を積極的に推進し、国産人参栽培に成功した。その結果、1763（宝暦13）年国産人参は500万株にまで増殖し、ついに和産人参座が江戸に創設された。吉宗が朝鮮人参生根を移植してから42年後であった。それ以降、朝鮮人参の輸入は年々減少し、銀流出の抑制につながり幕府財政の再建に貢献した。⁽¹⁵⁾

さて、新将軍吉宗は外国人にどのように映ったであろうか。将軍襲職直後、来日した朝鮮使節は新将軍像を次のように記している。

吉宗為人、精悍俊哲、今年三十五歳、気岸魁傑、且有局量、好武而不喜文、崇儉而斥華奢、其為政必先敦朴、撫恤窮民、国人莫不讚頌。⁽¹⁶⁾

「吉宗は精悍にして俊哲、度量は大きく、文より武を好む。自ら率先して儉約を重んじ奢を排する。民衆を慈しみ、彼を称赞しない者はいない。」と申維翰は書く。壬辰倭乱という過去の経緯から日本人評価の厳しい朝鮮文人も吉宗を傑出した人物と賛辞を送っている。この好意的な評価は吉宗の朝鮮観・朝鮮政策が反映していると考ええる。

註(1) 例えば現在日本宮内庁書陵部蔵『医方類聚』は、壬辰倭乱時加藤清正が略取したといわれている。また、慶尚道密陽キョンサン ド ミリョンで毛利輝元軍は、朝鮮医書『山居キョシヨウバツスイ四要拔萃』を略取した。その他、略奪医書群には朝鮮で印刻された中国

医書も多数含まれていた。

- (2) 吉田忠「朝鮮通信使との医事問答」(日本文化研究所研究報告・第24集、1988年所収)。
- (3) 「接待事目録抄」(三木『前掲書』322頁所収)。
- (4) 『辺例集要』巻12、求貿条(田代『前掲書』20頁所収)。
- (5) この時期の疫病は疱瘡・感冒・赤痢・麻疹・熱病・疫病・痘瘡等多種類にわたった(大石『前掲書』、富士川游『日本疾病史』)。
- (6) 『正徳享保間実録』(富士川游『日本疾病史』所収)。
- (7) 同時代、尾張藩主は吉通に続き継友、加賀藩主前田吉徳、甲府藩主徳川家宣、5代将軍綱吉、皇室では中御門天皇、東山上皇達も疫病にかかるかそのため死去している(大石『前掲書』494頁)。
- (8) 宗家文書『吉宗様御代公私御用向拔書』(田代『前掲書』62頁所収)。
- (9) 『徳川実記・有徳院殿御実記附録』巻15。
- (10) 田代『前掲書』304頁。
- (11) 田代『前掲書』61頁。
- (12) 『海行摠載・海游録』10月6日、10月8日条。申は医者でなく、医事問答に関心がなかったのか問答内容には一切触れていない。
- (13) 『徳川実記・有徳院殿御実記』巻15。
- (14) 幕府の朝鮮薬材・薬種調査・蒐集令に呼応して、1721(享保6)年対馬藩に薬材質正官が設置され、越常右衛門が就任した。彼は『東医宝鑑・湯液編』のハングル和訳にも尽力した。また、彼には近世日朝交流史をまとめた『分類紀事大綱』39冊の大著がある(越の業績については田代『前掲書』に詳しい)。
- (15) 今村軀『人參史』7冊(朝鮮総督府専売局、1935-40年)。
- (16) 『海行摠載・海游録』武蔵州条。

6、『訂正東医宝鑑』成る

1722(享保7)年、吉宗は民衆救済と日本医学の発展を意図し幕府刊行物として許浚撰著『東医宝鑑』の発刊を決定した。同書は2年後、『官刻訂正東医宝鑑』と題し、幕府医師源元通の訓訂で京都書林から刊行された。『東医宝鑑』の日本最初の刊行本であり、享保年間に刊行されたから享

保本と呼んでいる。ここで言う訂正とは、原本改定・補訂という意味でなく、原著に訓読を施したことを指す。享保版の原本は、縦27センチ、横17・8センチの和綴じ本25冊からなっている。⁽¹⁾

同書刊行の意図は、大学頭林信篤の序文、訓訂者の源元通^{ぼつぶん}の跋文（奥書）に詳述されている。ここでは元通の跋文の大意を紹介する。

謹んで鈞命^{きんめい}（上様の命令）をここに拝する。大君（上様）の親政（享保改革）によって、法令は大いに整備され、その教化は天下に行き渡り、とりわけ台慮（上様の思慮）は医事薬物を大切にされる。（『東医宝鑑』は）歴代諸賢の書を編述して、治例を選び出し、方剂を蒐集して25巻から成っている。実にこの書は保民の真心、医家の秘宝である。今大君（上様）がこの書の刊行をご決断されたのは、蔵書に乏しい医家に与え、その診療に生かし、疾苦を抱える民庶に死生を全うさせたいとの願いからである。医業にかかわる者がこの書を胸中にしっかり蔵すれば、治療に当たり効を奏し、民命は久くなるであろう。（医家は）人の生を愛し、民に仁を心がけ、（上様の）ご趣旨に背かないことを心から願うものである。そうすれば民庶も大幸を得るであろう。⁽²⁾

同書の刊行は諸医家の羨望の書・実効の書で、民庶の大幸に直結すると言ひ、吉宗をはじめ関係者の強い思いが吐露されている。

しかし、享保本は発刊後の普及状況、発行部数、活用の実態等まだ全体像は明らでない。尾張藩の場合を見てもよい。江戸時代の寛永年間（1620～30年代）から元治年間（1864年）に作成された尾張藩蔵書目録では、奥文庫医書部141本中に『東医宝鑑』が記載されている。⁽³⁾ 分類は漢本でなく和本となっている。尾張藩所蔵文庫を継承した蓬左文庫の現存本は享保本であることから、目録記載の『東医宝鑑』も幕府から下賜された『訂正東医宝鑑』であろう。従来、日本国中の誰もが垂涎の書であった同書は、享保

年間に尾張藩のみならず広く諸藩、医師達に行き渡ったと考える。

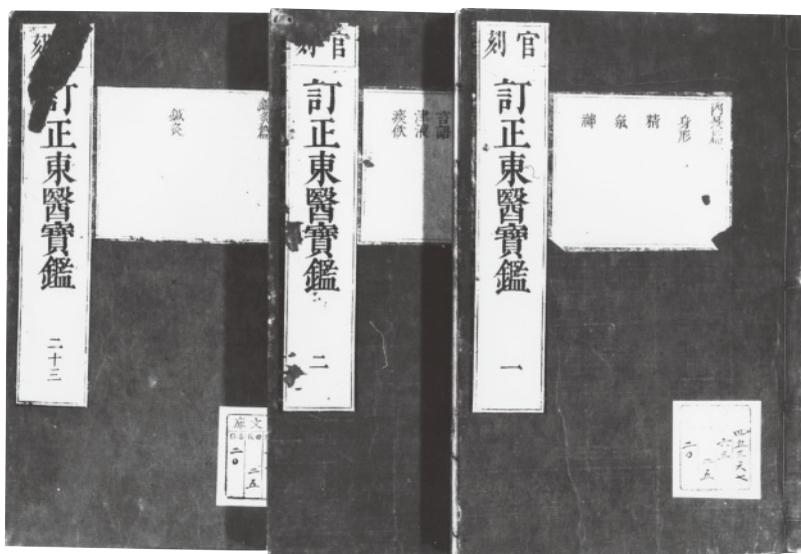
その後も許浚撰著『東医宝鑑』は日本人医師達の注目を浴び続けている。同書の薬草・薬材を扱った版本として、丹羽元機撰『東医宝鑑湯液和名』^{めい}2巻、写本では朴方貫撰『朝鮮薬名解』1巻⁽⁴⁾、『東医宝鑑湯液篇薬名韓称』1巻、小田幾五郎訳『東医宝鑑湯液篇諺字和解』^{おんじわけ}1巻がある。ここで各人が和名・和解と名付けるのは、ハングルを日本語訳したという意味である。許浚の『東医宝鑑・湯液篇』では、朝鮮山野の草木である薬材・薬種名は朝鮮固有の呼称のためハングルで記されている。享保本は校訂者達がハングルを和解できず、それを模写したまま板刻されているからである。さらに、本草学の刊行本では主として『東医宝鑑』から編録した小野識博撰『本草綱目啓蒙』48巻等、医書は典拠本を『東医宝鑑』とした丹羽元簡輯『観聚方要補』10巻、同『救急選方』2巻等がある。かかる許浚を日本人医家達は「杏林^{きょうりん}（医家）の扁倉^{へんそう}（医聖）」と称えた。江戸時代の日本医学・医薬発展に許浚撰著『東医宝鑑』の果たした役割の大きさは計りしれない。

さらに、吉宗は1730（享保15）年、庶民向けの疫病防災本として林良適（良以の養子）・丹羽正伯編『普及類方』^{ふききうるいほう}を発刊し、幕領・藩領を越えて普及させた。⁽⁵⁾ 許浚のハングルによる疫病対策本と同様の趣旨である。

以上のような医療制度改革を経て、日本にも国家的視点に立った本格的な医療制度が確立されたのである。これらの諸施策は朝鮮王朝の医療制度と類似点が多いが、これは決して偶然の一致でなく吉宗構想は朝鮮の医療体制をモデルにしていたからである。

註(1) 名古屋市蓬左文庫蔵本。享保本は蓬左文庫、京都大学附属図書館・富土川文庫等で閲覧できる。原本は次頁の写真参照。

(2) 『訂正東医宝鑑』23、跋文条。原文は訓読漢文。1724（享保9）年、同書は吉宗の手元に届いた。校訂者源元通は前年に死去していたため、吉宗から子息元信が校訂助手の役割を果たしたとして褒賞を受けている。



享保本『東医宝鑑』（名古屋市蓬左文庫蔵）

- (3) 蓬左文庫『尾張徳川家蔵書目録』第8巻。同目録の書名は『訂正東医宝鑑』でなく、『東医宝鑑』と墨書されているだけである。
- (4) 朴^{パク}氏の祖先は壬辰倭乱時、島津藩に拉致された朝鮮人である。
- (5) 大石『前掲書』496頁。

7、近世日朝医学交流—朝鮮通信使を中心にして

江戸時代、日朝医学交流が大きく発展した要因は、朝鮮通信使の来日と朝鮮釜山倭館の存在であった。倭館は朝鮮医書、薬材・薬種等の日本調達に機能した。しかし、本稿では朝鮮通信使医員と日本医師との医学交流を述べる。江戸時代、朝鮮使節の来日は1607（慶長12）年にはじまり、1811（文化8）年まで12回を数えた。毎回数百名から成る朝鮮使節団は、当時朝鮮でも選りすぐりの学者・文人達からなり、当然優秀な随行医員が選ばれた。とりわけ1682（天和2）年の朝鮮使節から江戸幕府の強い要請により、随行医員に良医が加わったことにより日本人医師達と質の高い学術交

流が交わされた。

一例をあげよう。1711（正徳元）年、第8次朝鮮使節の良医は奇斗文^{キトマン}であった。美濃大垣藩医師北尾春圃は斗文との医事問答を熱望したが、往路は使節団一行多忙のため春圃の希望が叶わなかった。帰路大垣で使節が一泊した夜、春圃と子息達は斗文の宿舎で夜を徹して医事問答を行った。翌早暁、使節団は大垣を出立し、次の昼食休憩地の中山道今須宿に向かった。春圃は自分の抱えていた難病人を籠に乗せ、使節団の後を追った。今須で昼食中の斗文に病人の診察を依頼したところ、彼は快く応じた。その際も両者は患者を前にして臨床問答を交わしたことであろう。斗文は春圃を「東海の天民」と称賛し、春圃は斗文を師と仰いだ。⁽¹⁾両国医師の病人への仁情と病氣治療に対する熱意がうかがえる。春圃は斗文との医事問答と自らの臨床経験をまとめ『桑韓医談』2巻を刊行した。彼は他に『提耳談^{ていじだん}』、申維翰序文の『精気神論』を著している。いずれの著作も日本人医師達は所望した。彼の子息春倫は1711年、1719年の使節医員達と大垣、大坂で交流を重ね『桑韓墳薈集^{そうかんいん こしゅう}』2巻、『心下虚実論』1巻を著した。

江戸時代、春圃・春倫父子以外にも通信使医員と日本人医師との医事問答をまとめた医学書は多数出版され、日本医学の隆盛期を出現させた。以下の年表の通りである。なお、年表事項には中国も加えて近世（江戸時代）日朝中3国の医学交流年表にした。

1592(文禄元)年、壬辰倭乱（日朝中3軍の戦い）始まる。この間、日本軍、朝鮮・中国医学書（朝鮮版）大量略取。朝鮮医員の拉致。朝鮮社会、荒廃し疫病蔓延。

1607(慶長12)年、第1回朝鮮使節、来日。礼物に朝鮮人参有り。

1610(慶長15)年、許浚撰著『東医宝鑑』完成、内医院にて刊行。

1624(寛永元)年、中国人張介賓『類経』32巻等刊行、朝鮮に伝播。

1636(寛永13)年、岡本玄治、朝鮮医員と医事問答および治病。

1638(寛永15)年、紀州藩主徳川頼宣、朝鮮薬草36種を求請。

- 1657(明暦3)年、朝鮮医員^{ハンヒョング}韓亨国、対馬藩主宗義成を往診。その後も医員の来島続く。
- 1663(寛文3)年、対馬藩、『東医宝鑑』請来。
- 1682(天和2)年、幕府、朝鮮王朝に朝鮮使節の中に医術に精しき者(良医)の派遣要請。以後、使節に良医加わる。
- 1684(貞享元年)、日本、疫病蔓延。その後、継続して発生。この頃、朝鮮にも疫病続発。
- 1711(正徳元年)、稻生若水、使節医員^{キトムン}奇斗文との本草問答。『庶物類纂』刊行。序文は使節従事官^{イトンクワ}李東郭。
- 1712(正徳2)年、大垣藩医北尾春圃、医員奇斗文との医事問答。『桑韓医談』2巻刊行。
- 1714(正徳4)年、日本、風疾諸国に流行。その後も続く。
- 1716(享保元年)、8代将軍徳川吉宗襲職。享保改革の医療制度改革始まる。日本、熱病大流行、江戸市中の死者多し。朝鮮、疫病流行。
- 1717(享保2)年、吉宗、『東医宝鑑』を座右の書。
- 1719(享保4)年、吉宗、通信使医員と医事問答を命ず。4回実施。北尾春倫ら^{クワンイド}医員権利道と問答。『桑韓埧笈集』2巻刊行。幕府の招請に応じ、中国江南蘇州府医者呉載南、長崎に来日。
- 1721(享保6)年、対馬藩、朝鮮人参生根3本献上、育種。
- 1724(享保9)年、吉宗、幕府刊行物として『訂正東医宝鑑』刊行。
- 1725(享保10)年、中国医朱佩章、来日。
- 1726(享保11)年、幕府、長崎滞在中国人船主に人参・龍腦等の栽培調査と薬種の持来を命ず。
- 1730(享保15)年、幕府、疫病対策の『普及類方』刊行。日本、風気・麻疹流行。
- 1744(延享元年)、清商李仁会、長崎に渡来。李に種痘をなさしむ。こ

- の頃、日本、朝鮮、疫病大流行。
- 1748(延享5)年、加藤玄順『和韓人参考』刊行。医員白興詮^{ベクワンチョン}等との問答。吉田金峰『桑韓鏘鏘録医談』刊行。医員趙活庵^{チョカルアン}との問答。河村春恒『桑韓医問答』刊行。医員趙活庵との問答。樋口淳叟^{かんきやくちけん}『韓客治験』刊行。使節医員の治験症例集（-49年）。
- 1752(宝暦2)年、清の『医宗金監』、輸入。
- 1763(宝暦13)年、かつて朝鮮産人参3株譲渡され、じらい42年、500万株に増殖し、江戸に和産人参座設置。中国にて乾隆版『東医宝鑑』刊行。
- 1764(宝暦14)年、尾張藩医山口忠居『和韓医話』刊行、医員李佐国^{イ・チヨフク}との問答。江戸医師田村藍水『倭韓医談』刊行、李佐国との問答。
- 1766(明和3)年、燕行使朴趾源^{パクシウォン}、中国で乾隆版『東医宝鑑』を見る。高額に驚く。
- 1772(安永元)年、日本、この年から数年、疫病大流行。被害甚大。
- 1776(安永4)年、望月安英、朝鮮版『經史証類大観本草』翻刻。日本、風邪・麻疹大流行。
- 1788(寛政10)年、日本、元の許国禎『御薬院方』の朝鮮版を印刷。
- 1799(寛政11)年、『東医宝鑑』の版木を求め大坂で刊行、寛政本。丁若鏞^{チヨンヨ}『麻科会通』刊行。アジア麻診書の第1（-98年）。
- 1816(文化13)年、日本、疫病・痢疫・風邪等流行。
- 1821(文政4)年、中国にてコレラ全土に大流行。朝鮮、日本へ伝播。日本ではコロリ病と称す。東アジア地域、被害甚大。
- 1832(天保3)年、スペイン風邪、日本、朝鮮で猛威。
- 1862(文久2)年、日本、朝鮮、中国にてコレラ再度流行。
- 1890(明治23)年、日本の寛政版『東医宝鑑』、中国で覆刻本刊行。
- (以上、三木栄編著『朝鮮医事年表』、『対外関係史総合年表』他より作成。

下線は中国関係事項。また、上記年表事項で享保改革の医療制度改革年表と重複する事項は極力省いた。）

また、日朝中3国で許浚撰著『東医宝鑑』の刊行回数は次の通りである。

朝鮮 - 癸丑本（1613年）～光緒乙酉本（1885年）、16回刊行。

中国 - 乾隆本（1763年）～錦章書局本（1917年）、13回刊行。

日本 - 享保京都書林本（1724年）、寛政大坂書林本（1799年）、2回刊行。⁽²⁾ 現代に至り、同書の日本語翻訳本は1972年、1978年に2著が刊行された。

註(1) 三木『前掲書』314頁、安福彦七・安井広迪『北尾春圃』（日本TCM研究所、1988年）、仲尾宏『朝鮮通信使をよみなおす』（明石書店、2006年）83～86頁等。

(2) 『許浚博物館（誌）』より作成。

むすび

許浚は朝鮮時代中期、庶子というハンディを背負って出生した。彼は王朝医員の道を選択し、宣祖国王の御医にまで昇った。彼は後半生、朝鮮医薬学の再生と確立を期して『東医宝鑑』を完成させ、他に優れた医薬書を著わした。許浚撰著の『東医宝鑑』は朝鮮医学の集大成であり、中国（漢方）医学から朝鮮医学（韓方）の独立宣言書であった。許浚の医療行為は高位高官にもかかわらず終生、民衆的な視点を失うことはなかった。また、朝鮮時代、朝鮮の医療制度の中央集権化は日本よりも先行し、統一的な医療行政が疫病対策等に有効に運用された。

『東医宝鑑』の日本への本格的な受容は、8代将軍徳川吉宗の仕事であった。彼は同書を座右の書とし、朝鮮の医療制度を学び彼の国への尊崇を深めた。吉宗の実施した享保改革は医療・薬材制度の整備・拡充に始まり、

医療政策の国家集権化を推進した。それは日本国内の疫病大流行とそこから発生する社会不安という切迫した時代的背景があったからである。彼の医療改革の金字塔が『訂正東医宝鑑』の刊行であり、それを広く普及させたことであった。日本の医療・薬材制度は享保改革によって国家的視点で確立し、疾病に苦しむ江戸時代人を救済したのである。さらに、近世日朝医学交流は、許浚撰著『東医宝鑑』を基調にして医学先進国であった朝鮮通信使医員と日本医師達によって真摯に継続された。これらの所為は、日本に優れた医学書を生み出し、日本医学の発展を著しく促進させた。その潮流は『東医宝鑑』を架橋にして、中国も巻き込み東アジア3国の医学交流に発展した。3国医者達は国境を越えて蔓延する疾病・疫病克服に協力し合い、広範な人々の健康保持に尽力した。1955年、訪韓した中国国家主席江沢民氏は韓国国会演説で許浚撰著『東医宝鑑』に触れて、中国人が長期間その恩恵に浴したと述べ韓国民に深い謝意を表した。これは上述の歴史的背景を指摘しているのである。

なお、本稿は2006年11月、韓国釜山大学校韓国民族文化研究所主催・国際学術シンポジウム「東アジアの文化交流」の基調報告をもとに加筆・補訂したものである。